(版權所有)

明治二十一年九月廿九日印刷
明治二十一年十月一日出版

通信女學講義錄

每月一回發行
壹冊正價廿錢
全國無郵送稅

第拾三卷

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○女子生理　（第十三回）

船越鼎太郎講

第二章　懷姙の事　（其十二）

前回申述べたる如く姙婦は通例月經の終りたる日を記臆致し置き之れに由て出産の日を推算するを得るものあれとも未た乳兒に哺乳せしむる間に姙娠するとあり此哺乳の間には通例月經のあきものあれは月經の終りたる日より算用すると能はず此時には始めて胎動を感したる日より計算すへし始めて胎動を感するは概ね姙娠の半途を經過したる時にあり尚は精細に述ぶれは此時は懷胎后既に一百二十四日を經過したり故に其分娩するまては尚は大凡一百五十六日を消費さゞる可ら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ざる筈なり去り乍ら胎動を始めて感ずるハ必ず一百二十四日と定りたるとにもあらず色々と變ずるものなれバ胎動に由て出産の日を知るハ月經に由て算用するものよりハ確實ならず。

姙娠の初期より月經に類したる下物を見て之れを月經と看做し出産の日を誤り算ふるとあり然れとも此下物ハ月經の如く子宮内より來るものにあらず多くハ膣の上部或ハ子宮口より出血するものにして其分量の尠きと血液の凝結ると概して二三時間にして之れを終るとに由て眞の月經と區別すへし斯くして其出血ハ眞の月經にあらざるを知れバ勿論此日より計ふ可らず眞の月經

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の終りたる日より算へらるべし。

看護婦のと

社會の進歩するに從て分業增々行なはれ歐米諸國にては或ハ病人を看護するを專業とし或ハ産婦を看護するを專業とするものあると既に久し本邦にても近來看病婦を養成する所出てたるハ一ハ患者の幸福を進め一ハ婦人に職業を增さしめ大に世に裨益あるとなり産婆を教育する所にてハ費用と時日とを多く要せずして産婦の看護婦を養成すると最易きとならん。

姙婦分娩して産婦となれは之れまて一家の家政を整理し衣食住等萬端の世話を致したるもの俄に病人の如く

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なり之等の事務をも他人に任せ反て他人の看護を受けざるを得ず然のみならず産出したる赤子の養育にも充分に心を配り手を盡さゞる可らず故に産婦の看護並に赤子の取扱方に熟練したる婦人をして看護せしむるハ實に必要なるとなり産褥にある間看護婦として懇意のものを頼まるゝにも或は雇人として他より雇入れらるゝにも先つ其性質を撰まざる可らず左に聊か看護婦の撰み方に附て述ん。

産婦の看護婦にハ中年のものを撰ぶべし若き婦人ハ物事を深く考ふるとなく竊笑ひ易く殊に産褥のとに不案内なり又老婦は視聴の感覺鈍く所謂老耄にして物の用

四

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に足らざると多し婚姻したるときは獨身のものよりは既婚のもの若くは寡婦にして分娩したるとあるものを適當なりとし獨身のものは産褥の心得なく又赤子を取扱ふとに拙きものなり。

看護婦は温順と深切と善良の性質とを具へ歩行、戸、障子の開閉にも荒々からず言語も高聲ならず又饒舌なる可らず言語擧動の粗暴なるものは産婦小兒の安眠を妨くるのみならず或は痙攣を發さしむるとあり又沈睡するものもよろしからず之れ夜間に要を辨ぜしめんとして之れを醒覺すると容易ならず或は鼾聲を發して産婦赤子の睡りを破るとあり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

看護婦淨麗好なれは己れの身體及衣服を清潔にするのみならず産婦及赤子のヿに付きても清潔を貴み衣服食物より行水等のヿに至るまて其注意する所深く室内も整然として物品を亂たすヿなく食事終れは忽ち器具を運ひ去り衣服を着換ひ或ハ尿布を交換ふれは暫も之を室内に殘すヿなく或ハ空氣日光に露し或ハ洗濯して他日の要に欠かさらしむ。 六

看護婦を新に雇ひ入れらるゝヿもあらば出産前一二週日も前より雇ひ來り置き其性質を試みらるへし。

懷姙中の心得ハ右の條々にて一と通り講述を終り次回よりは分娩のヿに付き説明申すへし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○育兒心得（第十三回）

船越鼎太郞講

第二章　孩兒の事

問。前章に於て赤兒養育の御教を仰き候得共其子ハ生長して齒牙も生へ母乳を離れ食物を食じ歩行をも致し言語も綴るに至らハ育兒の法方も必ず同じかる間敷く存候諸先生方の育兒法をも拜見仕り候得共育兒法と云へハ多くハ乳兒の養育法のみにて我々母親の身にとりてハ誠に遺憾に存候何卒豫て御約束の通り之れより孩子の養育法に付き順序を追ふて御講述被下度候。

答。講述の順序ハ勤めて赤子養育法の通りに致すへく候此講義錄にハ成る可く理論にのみ彌るとハ申し上け

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ず專ら實際のとのみ御講述申上ぐる覺悟に御座候左り乍ら茲に養生法中最も大切なる原理とも申すべきもの之れあり候に付き先つ第一に此事を申述へく候。

母親の孩子に衣服を着せしむるに活潑なる夫ハ薄着を進め其寒冒に罹るとあれハ原因ハ厚着にありと攻め姑ハ厚着を進め其病に罹るとあれハ原因ハ薄着にありと詰るとあり斯くの如き場合ハ世間數々見る所に候吾姉妹即ち孩子の母親ハ如何致さるへきや夫に從ハんか姑の言に背かざる可かず姑に順ハんか夫の命に逆らハざるを得ず熟ら之れを考ふるに夫の言ハるゝ所にも亦姑の言ハるゝ所にも充分の理あり故に兩ら之れに從ハる

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

るこそよろしかるへく候。病の原因には吾々の眼に視へ手に觸るものと全く五官に感せさるものとあり其五官に感ずると感せざるとに論なく原因には必ず身躰を侵すへき侵襲力あり然れども身體には之れを防禦する抗抵力あり其抗抵力の弱きものを過敏性即ち薄弱の人と云ひ其抗抵力強きものを不敏性即ち強健の人と云ふ今假に寒氣に五の侵襲力ありとし一人は其抗抵力五あり他の一人は三ありとすれバ甲は裸體にても其寒氣に抗抵して凌ぐを得へきも乙は衣服等の力を借りて其足らざる所の二の抗抵力を補なはざる可らず然るに今寒氣増して十の侵襲力となり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

たる時ハ甲も亦衣服の力を借りて其足らざる五の抗抵力を補ひ乙ハ亦七の抗抵力を補ハざる可らず若し之れを補ふの方法を誤る時ハ必ず疾病に罹るものに候寒氣の侵襲力と孩子の抗抵力とを計りて衣服を調節すべしと云ふハ姑の理ある所にして従かハざる可らざる以所に候又身體ハ習慣等に由り或ハ過敏性となり或ハ不敏性となるものに候へは嘗て寒氣に抗抵する力多かりきものも常に厚着に習慣する時ハ遂に過敏性となるべく之れに抗抵する力少かりきものも漸く薄着に習慣する時ハ不敏性となるものに候孩子を成るへく不敏性となして病の侵襲力に襲われざる様に致すへしとハ夫の

一〇

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

言ふ所に理あり之れ亦順かはざる可らざる事に候故に養生法とハ身體を過敏性に陷れざる樣に心懸け成るべく不敏性とし能く病の侵襲力に抗抵致す樣にせられ若し其侵襲力强くして敢て敵す可らざるものハ衣食住等の力を借りて其足らざる所を補ひ抗抵防禦の策を廻らし或ハ豫防法を行ふて病の侵襲力を避け若くハ其末發に除去せらるへく候。

問。一ヶ年位に生長したる孩子にハ如何樣に行水を致させべきものに候や。

答。孩子を盥に入るゝ前先づ頭部を洗ひ而して盥の內に入れ身體を殘る隈なく洗ひ將に行水を終らんとする

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に當て大なる海綿を盥の中に浸し之れを頭上に絞りて全身を洗ひ流すべし斯くして孩子を盥より出だし軟き西洋手拭の乾きたるものにて全身を拭ひ干かし殊に背腰四支の如きを手拭にて磨擦して后衣服を着せらるべく候。

問。十二ヶ月位の孩子には日に幾度行水致させ候て宜しかるべきや。

答。日に一回にて充分に御座候其時刻ハ夕よりハ朝の方宜く候去りながら孩兒薄弱なる時ハ夕に行水を致たさせ能く拭ひ取り直に臥褥に附かしむへし行水をするには五分時間より長く盥の中にあらしむ可らざるとに

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

候。

問。一年位の孩兒には冷浴と温浴と何れが宜く候や。

答。之れは前述の原理に由り孩兒強健にして冷水に勝ゆるものは之れを用ふれは其皮膚を不敏性即ち鞏剛にするの效あれども薄弱なる時は温湯を用ひらるべく候縱令温湯を用ひらるゝも其温度高過る時は皮膚を過敏性即ち軟弱となし殊に孩兒の勝へ兼て叫號するものを強て行水せしむるか如きは甚た殘酷なることにして大害あることに候通例冬は熱湯を盥の内に入れ水を注ぎて微温湯となし夏に近附くに從て漸く其温度を減じ遂に冷浴を用ふることに候。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

問。行水の時に孩兒の頭部を洗ふと毎日なれば寒冒に罹り易くなると申すものあり如何に御座候や。

答。否、毎日頭部を洗ふとは反て寒冒を防き頭皮を清潔にして頭垢を除き毛髮の光澤を相增すものに候頭髮は洗滌て後ブラッシを用ひらるべしブラッシは頭皮の血行を宜くして寒冒を防ぐものに候。

問。右の外孩兒を行水せしむるに付き心得置くべきと之れあり候や。

答。石鹼を用ふる時は眼に入らざる樣に致たし垢擦を用ひて表皮を剝脫ざる樣にし浴後耳、孔、毛髮、股間、腋窩、等に水氣の殘らざる樣御注意致たさるへく候。

一四

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

問。孩兒を伴ふて洗湯に至り候節ハ如何取扱ひ候て宜きものなるや御序に一寸伺ひ置き度候。

答。先つ孩兒を沐浴せしめ全身を洗ひ將に浴を終らんとする時微温湯を全身に注き漸く其温度を減じて殆ど冷水に等きもの若くハ冷水を灌ぎて速に西洋手拭にて拭き全身を乾燥せしめ背部、腹部、臀部、四支の如きを磨擦して后衣服を着せしめ而して後母親ハ其身のことに及ぶべし孩兒を入浴せしむる間小桶若くハ小柄杓の如き翫弄物を與へらるゝハ宜きことにして孩子ハ入浴中に樂を得又智惠を發達せしむるに效あり親母ハ亦孩兒の餘念なく湯を攪拌して居る間に其身體を洗滌するに便利な

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

るものに候(そろ)。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

經濟學

通論

北溟漁士

一家の内部を支配する所の女皇、子供を教育する所の教師、一家の交際を調理する所の花、は誰である、即ち婦人である、然るにこの一家内部の支配、外部の交際、子供の教育、にはぜひとも經濟學の一通りは心得ておる事が必要である、故に今より私が「ホーセット」氏の經濟書を基とし之に「ミル」「スミス」等の名説を交ぜ、又私の愚按をも附加へて成べく簡單に平易に、經濟學の大意を陳たき覺悟である、が始めに御注意を願ひおき度事は、全躰何事でも習ひ始めといふものはキット難かしひ、縫物でも音樂でも始めて針の持ち樣音の出し方を習ふ時分には此んな面倒くさひ、面白くないものが何うして出來る樣になるものか、と誰でも思ふ、然し夫を耐らへて勉めてゆくと大分調子が解つて容易くなる、夫から面白くなる、夫から進歩する、夫から終に上達をする、となれば一本の針で自然を欺く樣な立派な細工も出來、指の動し方で鬼も泣樣な微妙な音樂も奏る事が出來る、一つの手仕事ですら斯の如きものである、まして經濟學は一國一家一身に採りて莫大なる利益のあるものであるから其組織理屈も余程込入つておる、故に始め

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は難かしひ、面倒な、厭ふかと思ふ様な事もあろふ、然し其處が勉强である、奮發である、暫く之を忍んで研鑽をすれば、追々と其理由が解つて、經濟の眞の味を知る事が出來る、サテ經濟學は一口に云へば富の學問である、即ち儲よふ得を採ふといふ學問である、故に世間には此學問の譏謗をするものがある。其言に

經濟學者といふものは、何でも金を儲よふ、得を採ふと云ふ事ばかり念掛ておる、人間には義理といひ、人情といふものがあつてこそ人間の氣高き値がある、經濟學者は義理も構わず人情も顧みず、得にさへなり、金にさへなれば、何でも爲ると云ふ利慾主義である、故にかよふな學問が盛になれば人が吝嗇になり、貪慾になつて世は亂れる

と言ふ趣意である、之は誠に要らぬ心配である、間違た考である。例へば茲に

凡そ日本の子供をして六才より十才までは必ず學校にて學問をすると定むれば社會には利であるか害である乎。

といふ大問題の起つたとき、随分種々な答が出るであろふ、醫者は衛生の事を論じて夫ては子供の發育が鈍くなるとか、イヤ健康を重ずる様になつて病氣が減るとか論じる、宗教家なればソーすれば智識がまして人間が道徳を重んじる様になる、イヤ却つて自然

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の自由に任じた方が順良な結果がある、とか論ずる、ソコデ、經濟學者は右樣な事には一向頓着せず、先つ第一ハ職工社會に如何なる影響を及すか、貨物を生産すのは多くなるか少なくなるか等の點を考ふる、兒供とはいへ若し學校へ出さなければ、一日幾らかの賃銀を得る職人である、夫を悉く學校へ出せば一時職人が減る、職人が減れば、賃銀は騰る、賃銀が騰れば百圓で出來る物も、百五十圓を要する、詰り五十圓の損である、から此仕組は害がある樣だが左樣ではない、何となれば職工といふものは、他から動さるゝ器械的のものではなく、自ら動くべきものであるから智識思想と伴なはねばならぬ、敏き職人は愚な職人が三日費す業も一日にて而も優りたる事を仕遂ぐる道理であるから、一般に子供の裡に教育を受させておくとは有益である、といふ事を懇ろに説明すのが經濟學者の本分である、左ればとて道德も衛生も要らぬといふのではない、諺にも云ふ通り命ありての物種にて、命ほど大切なものはない、又道德を守らなければ眞の幸福を得る事ができない、其外人類に必要な科目は澤山ある、此等はおの〳〵其専門家に任せ、經濟學は富を生産す事と之を分配る法と之を交換る仕方とを説くものである。

サテ今まで富々といふ事を幷べて書立たが、富といふものは何んなものである、富は如

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

何なる品物にても他の物と交換の値のある品物であればナンでも富である、例へば空氣の如きものは我々人間には一秒時もなくてならぬ品物である、然し空氣はどこにでもある、又いくらでも盡ない、であるから誰も空氣と品物とを交換よふといふものはない、故に空氣は富でない、水も其通り必要なものではあるが地から湧き川に流れて勝手次第に汲み用ふる事が出來るから、誰れも之と品物を交換よふといふ者はない、故に富ではない、然し時とすれば富となる事がある、大阪の方々は能く御承知であろふ、大阪の井戸の水は大概不潔で飲用に害がある、故に水屋といふ商人があつて淀川の水を汲取つて之を市中へ賣付る、大概一荷が一錢位である、ソコデ淀川の水は元來富ではないが、水屋の勞働が係るから始めて一荷の水も一錢といふ貨幣と交換るとが出來て富となる、又日本にはズット昔しから石炭坑が在つた、在つたけれども使ひ道がないから誰も石炭と他の物とを交換よふといふ者が無つた、から一の品物ではあつても富といふ品物ではなかつた、然るに今日になつては運輸にも製造にも石炭が必要であつて石炭を望む人が澤山となつて、始めて石炭が富といふものになつた、シテ見れば富といふ品物は品物自らが元來の性質ではなくして、時と處、即ち社會の有樣に從つて同じ品物でも富となり、或

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

貨幣ノ功

はならぬといふ事ハ明了である。

右の次第であるから、同じ日本の同じ國でも、昔しと今日でハ富の有様が大變に違つてある、昔しの生活の有様といへば土の穴へ棲むか、或は木の皮で葢ひたる小屋の内へ住ひ、身にハ木の葉か獸の皮を着て、禽獸魚類の肉か木の實を食つておつた者である、夫か今日の様に開けたとを考れバ驚き入た次第である、然し數百年の後に今日を顧みたれバ、今日も亦驚き入つた有様であろふ、ソコデ經濟學者ハ今日まで進歩せし有様を調べ又此後の進歩開明の法を謀るものである。

今日まで社會が進歩したのハ種々の原素がある、然し其中で**尤も大なる功能のあるのハ貨幣といふ便利なものが出來た事である**、大昔しハ貨幣といふものがない、故に賣買といふ事もない、單だ品物と品物とを交換をした、假へバ農夫が魚を食たいとおもへバ、先づ濱邊に行きて米が入用で、魚の不入用なものを見付出さねばならぬ、見付だした後ハ、此米のどれほどを魚の何疋と換ゆれバ世間相當であるかも解らない、一々日用、すべて之でハ面倒だ、不都合であるといふ處よりして、終に貨幣といふものを造り出した、貨幣は何品とでも交換得べき性質を持てをるから、何品の代としても、又誰に拂つ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

貨幣ノ能力

其二

マーカンタイル、システム

ても差支がない、故に貨幣は交換の媒介となる、夫のみならず物の相場といふものが立つ、假へば米が一斗二升が一圓と相場が極れば、他の品物も亦夫々極つておるから、直ぐ一目にて米何升は、魚何疋に當る、木綿何反に當る、といふとが解る、故に又貨幣は交換の分量を明にするものである、此二つの便利が無つたらば、決して今日の如く社會が進歩しなかつたに相違ない、處が右の如く貨幣は、何品とでも交換られるといふ便利があるものであるから、世の人々が貨幣は即ち富であるといふ謬を抱くものがある、此謬説は今より百年程前に、アダムスミスといふ經濟學者が解破るまでは歐羅巴諸州に行われ、貨幣は即ち富である、其國の富は貨幣の有高である、何でも貨幣さへ取込めば富むといふ主義からして、「マーカンタイル、システム」といふ政略か行はれ、英國なぞにては輸出する品物には恩賞を與へて之を勵し、輸入の品物には苛き税を課して之を扞く樣な、種々の方法を用ひた、其主義の謬なる事、貨幣の事、等は各々其章にて論ずる事なし、之よりして富を生産すと云ふとにつきてお話致さん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○百人一首講義

第五回

鈴木弘恭講

素性法師

素性ハ。俗の時の名を良岑玄利といひて僧正遍昭の子也。初め父の宗貞出家して名を遍昭と改めしゆゑ。その後玄利も出家して素性と改めしなり。後ちに權律師となりて雲林院に住せり。素性ハ宇多天皇の頃の人であります。

今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまち出つるかな

此の歌古今集に出づ。さま〴〵の說ありて。顯昭ハ一夜のことなりといひ。定家卿ハ一夜のことに非ず。幾夜もかさねて終に有明月になるまで待ちしといふ意なりといはれたれど。さほどにむづかしく解くにも及はざるべし○長月ハ。九月の異名也。九月のことを菊月とも長月ともいふ也○ありあけの月ハ。陰暦の二十日後の月也。陰暦の二十日後の月ハ夜半過に至りてさしのぼり。夜があけても大空に影が殘りてあるゆゑに有明月といふ也○出つるかなハ。いでつるかな也。此の歌は戀のうたであります○一首の意ハ。約束をした人が。いま來やうと云たばかりで來ないのに。我ハその一言を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ゐてにして。九月は最も夜の長き時節なるに。夜ふかすぎになりてさし出る有明の月のいづるまで待て居て。つひにその月がいでたヂャナア。さても〳〵かくまで我が待つ心のつらさを推察せずして。我が思ふ人ハ何をしてゐるならん。もし僞りて我を欺きしにはあらぬかと歎息の意を含めたのでありますО語格は。徒の結にて指辭なし。一段切れの歌であります。

文屋康秀

康秀ハ。家系詳ならず。或云字は文琳といひて。縫殿助宗于の男なりと。古今集に。文屋の康秀が三河掾になりて云々とあるを見れば。高官にはあらざりしも。詠歌に巧みなりしかば。六歌仙の一人と稱せられて。後世にもその名甚だ知られたるなるべし。康秀ハ陽成天皇の頃の人であります。

吹からに秋のくさ木のしをるればむべ山風をあらしといふらん

此の歌は。古今集の秋部にありて。是貞のみこの家の歌合のうたとあれば。康秀にはあらずして朝康の歌なるべしとて眞淵翁は朝康と改めましたが。そのわけは同書に。二條の后東宮のみやすん所と申ける時御前にて。康秀がかしらの雪とよみしハ。貞觀

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

十一年より後元慶元年より前のことにて。五十余の齢あるべし。さて此是貞の親王ハ仁和のみかどの二の皇子なれバ。此歌合の比康秀もし世に在とも。いと老はてゝさることにつらなるべくもあらず。こゝハ次の歌と共に朝康なるべしとて改められたるなり。また古今六帖にも朝康とあれど。定家卿の本にハ康秀とありたるにや。しばらく本のまゝにして康秀の歌として置きましやう○吹からにハ。ふくゆゑになり○しをるればハ。凋の字にあたれり○むべハ。實に尤もといふ意にて。俗にナルホドといふに同じ○あらしハ。荒き風といふ義ゝ。風のことをしといふハ。日本紀に飈をつむじといふ類ゝ○一首の意ハ。秋の末になると寒くてあらき風が吹くものであるが。その風が吹くゆゑに。秋になると草も木も凋れてしまうがヾアそこで。ナルホド山風をあらき風といふのであらんとゝ。一説に山風とかきて嵐といふもじなれバ。しかいふといへど。文字にハなづまぬかたがよろしかるべし。又万葉集にハ。あらしてふらん。とあれバてふらんとすべしとの説もあれど。といふらんもてふらんも同じとゝ○語格ハ。徒の結にてらんといふ辭にて結びたり。此のらんといふ辭ハ。はも徒の輕き指辭の時も。ぞやかの何の重き指辭の時も。同じき辭にて結ぶことを得る格であります。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大江千里

千里は。阿保親王の孫。音人の子であります。或云音人の第二子なり。或は第五子なりともいふ。父の業をつぎて文學に名高く。殊に詠歌に巧みなり。宇多天皇の頃の人にて。伊豫權守などに任ぜられました。

月みればちゞにものこそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど

是も古今集に出たる歌にて。是貞のみこの家の歌合によめるとあり○ちゞは。ちよろづなどいふちにて物の數多きをいふ。漢字の千の字にあたれり○此のうた上句にちゞといひ。下句にひとつとうけたるは。なほ照應せしめたる之○眞淵翁の說に。白氏文集に。燕子樓中霜夜月。秋來唯爲ニ一人ノ長とあるを千里は儒士なれば思ひよりてよめるにやとあり○按ずるにそれまではなくとも。古へより日は陽の氣なれば。むかふに心の和するなり。月は陰の氣なれば。うちながむるに心も澄み哀れもすゝむものなり。などいへるが如く秋の月は何となく感情を催すものなるを以てかくはいはれたるなるべし○一首の意は。秋はもとよりあはれなるものであるが。いま月をみれば何となく種々無量のものがキット心にうつりきて。かなしくなつてくるがマア。我が一身の上に

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

のみくる秋ヂヤといふわけではないがマアナレド。人はどうか。我はどうした理くつでかく限りなく悲しく思はるゝであらうと〇語格は。一段切れの歌にてゝ二の句のこそが指辭にて。三の句のけれにて結び。さて下の句よりまた上へうち返して。我身ひとつの秋ではないが。なれど月をみればかず〲にものが悲しいとである。とかゝる格であります。

菅家

菅家は。菅原道眞のことゝ。道眞は菅原古人四世の孫なり。始め光仁天皇の天應元年。土師宿禰古人。天皇の侍讀として菅原の性を賜はりしより。其子清公。清公の子是善皆代々の天皇の侍讀たり。さて道眞は是善の第三子にして。幼年の頃より穎敏奇才を以て世に知られたる人であります。延喜年中に宇多天皇擢いでゝ右大臣に任じ。左大臣藤原時平と共に萬機を掌らしめ給ひしが。後ち時平等の讒言のために。太宰權帥に貶せられて。齡五十九才にて配所にありて薨ぜられました。後に一條天皇のとき特旨を以て正一位太政大臣を贈りたまへり。即ち天滿宮と稱して北野に齋まつれる大神のことであります。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

このたびはぬさも取りあへず手向山紅葉のにしき神のまに〳〵

此の歌は。古今集の羇旅部にありて。朱雀院の奈良におはしましける時にたむけ山にてよめる。とあり。此所にいふ朱雀院は朱雀天皇のことにはあらず。宇多上皇の御位を讓りてのち。朱雀院に御座ますをいふ之。古今集打聽に。昌泰元年に此の上皇吉野の宮の瀧御幸の次手に住吉へも御幸ありければ。奈良も道のゆくてにておましませるなるべしとあるは左もあるべし○このたびはといふに此度と此旅とをかねていへるなり○ぬさは。幣なり。神にものを祈る料に奉るものゝ總名之。多くは絹木綿の類を奉る之。此所にいふぬさは切り幣とて。古へ旅行するときは。青赤白などの布帛を細かに切りて。袋に入れて持參する例なり。さてこれを山にても海にても危險の所に臨みたる時は。神に祈りてその切り幣を神に奉るとて撒くことなり○手向山は。山の名にあらず。奈良より平安京に行かふ人々が。奈良坂の上まで手向する所をやがて手向山といひなせるなるべし。手向とは。品物を手を以て神の御前に向けて奉るゆゑに手向とはいふなりと舊註にあり。今俗に山の高き所の通路を峠といふも。たうげは。たむけの轉じたるにて。古へはかやうの所にては。人々皆幣を手向て通行するゆゑに。其名

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の殘りて終に手向といふ文字をあてゝたうげとよみ來れるこゝ。即ち此のうたは紅葉の散るを幣を散らすに見なしてよみたまへるなり○まに〳〵は。まゝにといふを重ねたることばゝ。萬葉集に隨意とかきてまに〳〵とよませたる所もあります○一首の意は。此度の旅行は御幸の供奉なれば幣も取りあはせないで來ましたが。さてその代りには。幸ひに此の山の紅葉が錦の如くに見にて散りますれば。即ち神の御心のまゝに我が手向する幣と見たまへとこゝ○語格は二段切れなり。一二の句此たびはの〳〵は指辭よて取りあへずのずにて結びて切れ。三の句以下神のまに〳〵と結びたるは。神のまに〳〵ありといふ義であります。

三條右大臣

右大臣は。勸修寺内大臣藤原高藤の第二子にして。右大臣定方のとこ。三條に邸あるを以て三條右大臣といふなり。醍醐天皇の朝の人であります。

名にしおはゞ逢坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな

此の歌は後撰集に出たり。詞書に女のもとにつかはしける云々とありて戀のうたであります○名にしおはゞは。しは助詞にてソレといふほどの言こ。名にソレ負ふあらば

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

といふ意也○逢坂山ハ。相坂ともかきて近江國滋賀郡にあり。此の山の名のあふさかといふを人に逢ふといふ詞にかけてよまれたる也○さねかづらハ。五味子といふ蔓草なり。五味子を取るには蔓を手繰よせて取るゆゑに此所よさねかづらを取出したる也○人に志られでハてもじを濁りてよむべし。五味子ハうち茂りてあるものにて。いづこより繰りよせてもそのあとの目立ぬゆゑに。人に志られでくるとハいへる也○くるよしもがなハ繰るに來るをかけていへり。もがなハ。濁りてよむべし。願の意の辭にて俗にアイタイモノヂヤといふことゝ也○一首の意ハ。逢坂山ハあふといふ名を負ふてあるが。その負ふてある名の通りに逢るゝものならバ。逢坂山の五味子を繰り取るが如く人に知られないで。女のもとへ行く由がありたいものヂヤと也。くるとゆくとハ同じ言なれバ。此所のくるハゆくといふ意に解すべき也。その例バ萬葉集などに多くあり。万一の卷に。やまとになきてかくらんとあるハ鳴て行らんといふと也。同八の卷に。けさなきてゆきしかりがねとあるハ鳴て來し雁がねのと也。是らを味はひて知るべし○語格ハ。一段切れの徒の結びよてもがなといふにて結びたる格であります。

三〇

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○小供のはなし

第十四回　忠義の家來二人

坊や孃やお前方忠義なお家來が欲しくばイクラでも貰らわれますから溫となしくして少し母の言ふ事をお聞よ、宅のお祖父さんが昔し武者修行をして日本中をお巡りなすつた時に或日路に迷うて偶と山の中へおは入なすつたとサすると或る谷かげに何んとも云へない大きな眞黑な男が雷のようなイビキをしてふんぞり反つて寢て居たから狐狸妖怪はもとより如何なる人間をも恐ろしがらないお祖父さんではありましたが此の大男は中〱人間ではない身の丈け五六丈もあり手足は數百年立つて大木よりもまだ太といから先づ〱此樣なものには拘はらない方が安全だと覺召して其の傍をそうつと通つて行かれますと彼の大男は乍まちムク〱と起き上つてコチラを見た其の眼のするどいとは狼の目を二十か三十も寄せた程で口の大きなとはほら穴ほどでありましたからお祖父さんも思はず身震るひしながら刀に手をかけてキット睨まるゝと彼の大男はしばし見つめて居たが思ひの外に優しい顏付をしてニコ〱と笑ひ急かに膝を直ほしてチヤンと座はり兩手をついて謹んで申しまするに私はあなた樣のお出を幾年となく待つて居りましたも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ので何卒あなたのお使ひが願ひたいので此後ともお伴につれて下さるように其代り私は何なりともあなたのお望みの者は何如なるものにても差上ます若し御膳が上りたくば早速に差上ます若しお召が傷みましたらば直様調へて進ぜます若し又お住居を定め遊ばすときには何如なる立派なる材木を以てでも御普請をしつらへますから何卒お使ひなされて下さるようよと言ひますからお祖父さんも意外の事と大層不審に思はれて之は定めし狐狸のたぶらかすならんとも思し召したが元來大氣なお方ゆへ夫では使つても遣らうが何分お前のような大きな男では毎日〳〵の扶持米が大へんに入るから困る己れも日本遍歷の身分で左樣な貯へも無いからと云つて一つ困らせようとなさるト大男はなほ〳〵平伏りてイヱ〳〵其の御心配には毛頭及びません私はたゞあなたがお使ひ下さりさへすれば宜しいので食物衣物など〻悉とく自分で調へますと申しますから夫れでは何も申すとは無い望み通り使つて遣らうと仰しやつて子此れから此男は眞黑だから黒太郎と名を付けて方々へ連れてお歩きなすつたと云ふことでスルト其後は食べるものでもお召でも宿屋でも万事此の黒太郎がお世話をして少しも不自由をさせ申さず其上給金と云つては少しも欲しがらず又た此の入用とても皆な自分で出して居たと云ふことでお祖父さんは實に幸

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ひなお方でありましたお前方も定めし此樣なお家來が欲しひでせう若しコンナお家來があつたら何れほど樂しひでせう、夫れだのにまだ〳〵此上にモウ一人でく〳〵忠義な婢を得て都合二人の家來をお持遊ばしたと云ふお話ですが今晩はモウ遲いから又此次にお話しゝませう、がお前方よく考へて置なさい此のやうな忠義なお家來は決してお祖父さん計りがお使ひなさるものではなくつてヨお前がたでも若しおとなしくさへしたら必ず得られますよ、ダカラ其譯は次に言ふて聞かせます今晩はよく考へてお息みなさいよ。

お祖父さんは一人の黒太郎丈でさい大層のお仕合せであるのに夫から又た行き〳〵てトある山に至られまするど矢張り躰の大きな美しひ色の白ろひ女が一人居つて黒太郎を見て會釋しながらお前さんはモウ旦那のお伴をなさるノうれしひとヨーどうか私の身の上をもお願ひ申して下さいとの事ゆえ黒太郎はお祖父さんの前に手をついて彼處に居りまするは私の從妹で之れも亦た多年あなた樣のお出でをお待ち申したので御座います彼れは御覽の通り大層に足が長う御座いますから女ながらも道を歩るくとが餘程上手で若しあなたが何處かへお出でに成たいと仰しやれバ乍ち肩に掛け申して幾百里の路を瞬たく間に參りますどうかあれをお使ひ下さつて私同樣に何なりお命付を願ひたう御座いま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

す夫にまたお給金の事並びに食物万端の入費は是又私同様一切頂戴いたしませず只だ何も自分で賄ひを致しホンノお使ひさへ下されバ有りがたいので御座いますと申ました。一人でさへ大層に自由が利くと云つて喜んでお出でなすつたことですからお祖父さんは早速に御承知なすつて之からは彼の黒太郎と今一人の女は顔が白ひからお白と名をつけて此のお白と二人の忠義の家來を連れて倘々諸國を巡歴なすつたそうですが、眞に重寶なことには御膳でもお召でも時々の宿屋でも皆な黒太郎が用意をして呉れて其の上嵐山の櫻が今比さかりであらふと仰しやればお白は直ちに二三日で其處へお祖父さんをお連れ申し又今比ろは田毎の月が定めし美しからふと思ふ比は又すぐとお連れ申すと云ふ有様で眞に幸ひなことでありました、坊や孃達はさぞかし此樣な忠義なお家來が欲しひでせうが此間だも申した通り之は決してお祖父さま計りにお附き申すものではなくお前がたにも矢張此の二人づゝのお家來があるのですよ。

先づ彼の土地と云ふ黒ひお家來を御覽一粒の種を播けば二三十粒の米が出來るのみか花を咲かせて心を喜ばせ果實を結ぶ木を生長させてお前方に味の能い梨子や葡萄を食べさせ又た綿が生へて衣服の料となつたり材木が出來て家を造ることが出來ませうが夫でも此 三四

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の土地はお前方より給料も貰はず食物も貰はないでせう、其上又た彼の水と云ふ白ろひお家來はイクラでもお前方の望み次第にお給仕をするのみか之に舟を浮べさへすれば一日一夜で京大坂までも參られませう而して矢張少しもお前方から給金も扶持も貰らひますまい。左すればお前方にも皆なあの黒太郎やお白と同樣な忠義な家來がありますので祖父樣と均しく仕合せの事ではありませんか、ダカラ能く之を有がたく思つて決して土や水をひどく使つては成りませぬ、又た土や水でさへ斯樣に温和しくして正直よお前方に使はるゝのですからお前方は一層温和しくして人の言ふことを聞き又たとひ何んな自分の利益にならないことでも人のお爲よなるとあらば身を粉にしてでも働ねばなりませぬよ。

第十五回　不思議の新衣裳

或る國の天子さまは大層美くしひ衣物がお好きで毎日〳〵化粧部屋に入つて半日は衣物を着換へたり何かして暮されたと申すことで夫故華美立派ある衣服とては山の如く有りましたがまだ〳〵美しひものとあらば何れ程の金を出してもお買上に成るとの評判高くありました。左ればにや茲に二人の機織なりと申すもの朝廷に申上るように私しども多年の修業により不思議なる織物を織ることを工夫いたし候其は眞に奇代の功徳あるものにて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

凡そ世の中にて何事か一つ一つの仕事を保ち居らんものが若しも其仕事役目に適せずは彼の織物を見れども見へず又其の任に適ひたる人々には眞に立派此上なく見ゆる最と不思議の品に候惟ひ奉るに天皇陛下もと人を知るの御明鑑に富ませらるゝとは云へ尙ほ斯る衣裳を召して億兆を辨じ王ふ龍想の煩はしさを少かにても省き玉はんには下々の喜び何如ほどにや候べきなど奏上したり、何がさて左なきだも斯る衣服とあらば万金を抛ちても求め玉ふの御氣性なれば直さま之に命じて速かに其の織物を織上げよと仰せらる。二人は畏こまつて新たに織殿をしつらへ極上の絹糸若干黄金莫大を請ひ申して之は悉く其の懐中に着服し扨て機には何者をも置かず只だ空手を空にあやどりて日夜營々として織上ぐるなるべし。然るに數日立ちて天皇は心もとなく思召し總理大臣を呼びて申さるゝようは如何に某かの新機も最早餘程に捗取りつらん其の樣姿を吟味せんもの御身の外にはなるべからず御苦勞なれども彼所に參りて事の躰を視察ありたしとなり大臣は兼てより彼の織物に不思議の功德あるよし承わり居れど吾れ數十年國家の重きを負ふて此の榮職を荷ひ世を治め民を安んじたるに少かも怠れりとは思はず自から量かるに固より能く吾が職に適するものならんとて深く信ずるものから敢て疑ふことなく畏こまつて直樣彼

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の織殿に行て見るに二人は最と鄭寧に之を案内し扨て是程に織り上げ申しぬ摸様も思の外に美しく色合も斯く引立ち申しぬと一々に指ざしてしきりに指示すにより大臣さようか〳〵と云ひ乍ら機の上を見るに一物もなし嗚呼や吾れ不幸にして此の神妙の織物を見得るの明なきや吾れ今ま位人臣を極めて總理大臣とはなれど悲しひ哉才之に適せざるかと歎息し乍らも斯る事を人に知らするは智慧なき行なりと覺悟し靜かに目鏡を取出してチツト目つめ又あちらこちらを感心らしく打ながめ乍ら「之は立派だ」「どうも之れは美くしひ」と心ろにもなき感歎詞を發し織手の功ら莫大なりと賞め置きてハウ〳〵の躰にて御殿へ歸り謹しみ愼しみて帝の御前へ出で限りなく新機の趣むきを賞賛し之れ然し乍ら聖德の致す所ろなりと言上して眞赤なウソを述たりける。

天皇は之を聞し召して特の外に喜こび玉ひ左らば之より多くある諸司百官をかわる〴〵遣わし彼の不思議の新織物を見せ申さんとて先づ何々卿何々書記官など云へるを一人一人送られたり然るに此の人々は何れも皆な固より何物をも見得たるにはあらねど若しも其實を吐き一物をも見候はざりきなど申したらんには乍まち其職に適せざるものと認められて早々に其官を奪われんとの恐ろしさに孰れも皆な總理大臣同樣のウソを述べ織

物の色合工夫眞に奇代の珍品なるよし交も言上したり天皇は左程に珍しき織物を得るの喜こびを加へて朕が朝廷の百官はかく迄でに皆な其任に適するよな樂ひ哉樂ひ哉天下泰平極れりなど承知して心中只ならず喜ばれたるぞ哀れなり。

左れば天皇ひとりつら〳〵思ひ玉ふに之を裁して衣裳に製らん前に朕も亦た一應之を見置べしとて或る日彼の織殿へ行幸の事仰せ出させ卿輔太夫數多召し具して玆に臨み玉ふ二人の織手は之れぞ一生懸命の場合と覺悟し恭うやしく迎へ奉りて之れなるは何々の模樣を寫し彼は何々の色合に似せたるものなど最と明細に分說す天皇優に御目をそゝいで之を見たまふに此はしなしたり機上に一物もなしアナヤ有司百官は皆な能く其任に適して朕は獨り其德を有せざる乎と大に驚ろき玉ひたるがサスガは万乘の君ビクとも爲玉はず靜かに落附きて鈴の如き御聲音にて善哉善哉汝ぢの功勞莫大にて御感斜めならぬぞと仰せあるに取卷きて守護し參らする卿輔太夫皆な口をそろへて賞め立てたり斯て一人の近侍のすゝめに由り來る大祭の日に之を以て仕立てたる新衣裳を召し玉ひ下々庶民に拜覽の榮を與へ玉はゝ更よ一層の功德に候はんとて則はち其の如く命じ玉ふ織手はかしこまりて劔を以て空を切り糸なき針にて空を縫ひ急がし氣にして其用意に着手したり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

扨ても當日と相成れば天皇下着を着けて待玉ふに織手は恭うやしく新衣裳と云へるものを捧げ來り之が下ばきにて候之が上衣にて候之れぞ長上衣にて候など一々に渡し奉りて玉躰よ裝はせ申す哀れむべし天皇ハメリヤスの儘にて馬に跨がり朕にこそ不思議の新衣裳は見へざれ汝ぢ庶民のうち凡そ其の職に適せん程のものは皆な之を見て定めし感歎いたすべしと密かにアキラメ玉ひ出御ある都の人民は兼ての評判に傳へきゝて今日は老幼壯少皆な道がわに平伏し恐る〳〵見上げ奉るに天皇白きモヽヒキ白きシヤツにてかひ〴〵しく手綱を取り高き帽子を戴きて嚴然身を反せハイヨ〳〵と御意あつて馬を進ませ玉ふ然れど何人も其身を奇しみて絕て天皇の御衣裳を奇しむ者あく皆な靜まり反りて恐れ入る唯だ傍はらに七八歲の童子も同じく拜覽してありしが最と頑是なく笑ひ出し見よ〳〵天子さまハ下着のまゝでお出でなりと叫びたるに今まで堪へ居たる見物ども一同にドット聲をあげて叫びたるがこハ倘ほ新衣裳の立派なるとをほめたるよて候ひしとなり。

此ですから何でも正直にしないと間違ひを生じて大いなるハヂを受けます若し此の天皇を初じめとし一人でも正直な人があつて正直なとハ何處までも直言したならば天皇が斯る耻辱を受け遊ばすともなく又た莫大の金や絹を盜賊同樣の惡る者に奪ひ取らるゝ氣遣

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ひもなかりしあらん夫故へお前方は何でも正直にしそして正直な事を言ふには少しも恐るゝことなくキッパリと之を言ひ又断じて行はなければなりませんよ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第三階終止言を承るテニヲハの事

らん

らし

べし

文學一斑　（第十二回）

語格　（其八）

第三階終止言の助辭　らんハ現在を推量する詞にして俗譯すればデアラウといふ意なり。古今集秋上あき萩の花さきにけり高砂のをのへの鹿ハ今やなくらん（なく(鳴)ハ四段の活用第三階終止言なりらんハ終止言を承る助辭にしてなくらんハ即ちナクデアラウと譯して意明けし）らしハらんと同じく現在を推量する詞なれどその意らんよりハ緩し。俗にサウナと譯すべし。万葉集かすみたつ野のべのかたに行しかバ鶯なきつ春になるらし（なるらしハなるサウナといふ意に心得て違はず）古言にハ此らしをらしきと活らかして云ることもあり　べしハ可の字の意にして形狀をいふ助辭なり。然る故にコロアヒとも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

べみ

べーを命令に用ゐる事

ハズとも譯して其意をさとるべし。上野などの方言にべイといへるは即ちこゝなるべしの音便なれば意も亦おなじ。萬葉集七巻道のへの草深ゆりの花ゑみにゑましゝからに妻といふべし いふ(言)波行四段第三階終止言にしてべしはその助辭なり此なるべしはハズと譯して意たがふことなし 又たのべしより良行四段一格の活用に轉じてべかりといふ べかりは可ク有リの約言なりクアの約かとなればなり 又くしき格にても活らきてべみべきべけれなども云り。萬葉集十巻時ならぬ玉をぞぬける卯花のさ月をまては久しかるへみ べみは可ク見ユルの意にして久しかるべみを俗言にいはゞ久シク有ルヤウダなどいふ意となるなり 源氏物語御法さるは身にしむばかりおぼさるべき秋風ならねど云々 べきは活らく助辭にて連躰助辭なり。おぼさるべき秋風とやうに下へ續く詞にて俗譯にせばハズといふ意にても頃アヒといふ意にても文意は解し能ふべし 延喜式鎮火祭の祝詞吾が名妹の命は上つ國を知しめすべ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

めり　なり　まじ

し。佛足石の歌に「穢なき身をバ厭ひ棄べしなどあるべし
ハ命令なり。べしを命令に用ゐることハ中世までハ少な
くして季世にいたりてハ頗る多し　めりハ見て有りの
意にて見る樣子をいふ詞なり。古今集秋下立田川もみぢみ
だれて流るめりわたらば錦なかやたえなん流るめりハ流レル樣子ニ思ハレルの意にして一首の意ハ立田川ハ紅葉ガ散リ亂レテ今最中流レル樣子ジヤ今渡ッタナラバ錦ノ如ク流ルヽ其錦ガ中カラ切レルデ有ウと云ること
なりこゝなる終止言を承るなりハ詠歎の詞にして俗にハワイ或ハ
ナアなど譯すべし。新古今集「津の國の難波の春ハ夢なれ
や蘆の枯葉に風わたるなり」金葉集「うぢ川の河瀬も見ぬ
夕霧に槙のしま人舟よばふなり」二首ともになりハワイ或ハナアと譯する時ハ意明けし　まじ
ハ不の字の意にて俗にマイといふ語に當るなり。將然言

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

な

ばかり

を承くるじと異なることなし。なハ勿の意にして終止言を承る詞なればば恨むな忘るな（恨むハ中二段の第三階終止言。忘るハ下二段第三階終止言なり。恨むなかれ忘るなかれの意なり）といふべし。初學の輩ら誤て連躰言にそへ恨むるな忘るゝななど云ことあり（恨むる。忘るゝハ第四階の連躰言なる故）甚き非事なり。又な云々そと續くる詞あり此なハ用言および形狀言の連用言と體言と助辭とを承て。吹な散しそ（ふきハ四段第二階連用言なり）甚くな侘そ（いたくハ形狀言第二階連用言なり）人な咎めそ。今日ハな燒そ（人ハ躰言にして今日ハのハは助辭のハなり）杯云り。な云々の下に添るそハ淸て唱べし。此そへハ四種正格、奈行變格、良行四段一格の活用ハ連用言より續け加行變格、佐行變格の活用ハ將然言より續くるを例とす、ばかりハホドと云意なるもノミといふ意なるもあり。竹

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

かー

と

取物語「三年ばかりありて」このばかりはホドと譯して違はず　伊勢の歌に「おきなさび人な咎めそ狩衣けふばかりとぞ田鶴もなくなる」此ばかりはノミと譯して歌の意通ずべし　かしは語尾につけて終を調へ又は詞にそへて願の意をあらはす助辭なり。源氏物語柏木めでたしか□し」和泉式部續集「いとまあらばたちより來かし」あまの河波源氏なるはたゞかしをそへて詞を調へたるにて次の和泉式部續集なるは願ひの意あり來かしは來テタモレと云てあまの川波に告るな抔云て終止言をも指詞を結たる詞をも使令言をも承て截るゝ之

と□とはすべて截たる詞を承て下へ續る助辭なれば必ず第三階の終止言をうくる筈なるに起ると受るとなどやうに連躰言より續くる者あり。此は大なる誤りなり。今その例をかゝげて示さん。古今集「くるとあくとめがれぬも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とも

くる（暮）良行下二段第三階終止言。

のを梅の花いつのひとまにうつろひぬらん」

わく（黎明）加行下二段第三階終止言 落窪物語「わびしと思ひたまへりとは愚なり」

佗しは形状言なくしき格第三階終止言 源氏物語葵巻「物おもふにあくがるなるたましひはさもやあらんとおぼし知るゝともあり さもやのやは係辭にてあらんのんは

その結なればさもやあらんにて截るゝなり其截れたるをとにて承て下へ續けしゝ 又體言を承て下の詞へ續くるもあり。古今集「秋の夜のつゆをば露とおきながら鴈の涙や野べを染らん」又云々の如くといふ意にて用ゐるとあり。六帖「世の人はつらき心ぞありあけの月と山にやいりもゐなまし 此歌は「世の人はつらき心ヲモツモノゾ私ハイツツ在明の月ノ如ク山ニ入テシマイマシヨウカイ」といふ意なれば此とは即ち如クの意之

ともは雖の字の意にてトテモテモなど俗に云意なるもあり。又たゞとにもをそへしのみなるもあり。伊勢物語「と

四六

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

りの子をとをづゝとをハかさぬとも思はぬ人をおもふものかハ（この歌のともハ雖の字の意なり）後撰集「足引の山におひたる白かしの志らじな人を朽木なりとも（この歌のともハとにもをそへたるのみなれバその意ハとゝ止たるに同じ）凡てともハ後拾遺集 雑四 せきいれたる名こそ流れてとまるとも」と云るごとく係詞を結ぶべき詞を終止言に移して承れどもとハ後撰集 春下 ともにこそ花をも見めと待人の」と云るごとく上に結ぶべき係詞あれば必ずその係詞を結び止てさらにとにて承るなり。又雖の字の意のともを省きてとのみ云るあり。日本紀 十三 あまたハ寐ずとたゞ一夜のみ（このとハともの意にて幾度ハ寐ズトモ唯ダ一夜ノミデモと云る也）

第四階の連體言の助辭　にをハ俗言もおなじければ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

うくる助辭のこと

にを

去の字の意なるに

殊にはいはじ。但し去の字の意なるにありて此のにと混ひ易し。咲にけり來にけりなどのには去の字の意のににしてこのには必ず連用言より續くなり。古今集「年のうちに春は來にけり一年をこそとやいはん今年とやいはん」万葉集「神無月あまゝもおかず降にせバたが里のまに宿らからまし」等の如し（來は加行變格第二階連用言。降は四段活用の第二階連用言なり）ことゝなるに（第四階連躰言を承るに）にて連用言を承るときはその連用言は即ち體言となりたるなり。縱バ霞みにこもるといへバ霞みといふ言は四段活用第二階連用言にはあれど言置て體言となり霞といふ一種の物になるなり。戀にくちなんなど云る戀も中二段活用第二階連用言なれど言置て戀といふ體言

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

より

まで

かな

に爲しものなり。只にこのに[]のみならず凡て連體言を承るテニヲハを以て連用言を承るときハ其連用言ハ即ち體言となる　四種正格、三種變格及び形状言とも皆同じと知るべし

より[]ハ從の字の意にして

まで[]ハ至の字の意なり。起るより寢るまでなどいふより[]まで[]なり。又きくよりまさる。日のくるゝまで見るなどの

より[]までも同じ

かな[]ハ哉の字の意にて詠歎の詞なり　詠歎の詞とハ嬉しき事にも、悲しき事にも其事をいふのみにてハ未だ足らざる餘聲を補ふ詞をいふ。今も希にハ怖ロシイ事カナ。嬉シイカナ等いふを聞くことあり其カナに異ならざるへ　俗にいふア、マアなどの意と心得て違はず。古今集「おとば山おとにきゝつゝあふ阪の關のこなたに年をふるかな　ふる（歷）波行下二段第四階連躰言なり　六帖「むさしのゝ草のゆかりときくからにおなじ野邊ともむつまじきかな　むつまじきハ形状言志くしゝき格第四階

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なり

連躰言なり

なりは「にあり」の約言にて俗にはヂヤと譯すべし體言を承るなりは此とおなじけれど終止言を承るなりは此と異なり混ずべからず。古事記「たをやめなり」新古今集「わが宿のものなりながら櫻花ちるをばえこそとゞめざりけれ」古事記なるは弱女ヂヤといふ意にして新古今なるは宿のものニアリながらの意なり

五〇

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

○眼鏡の話

村岡範爲馳 口述
佃 與次郎 筆記

昨年の冬あたりから始終天氣勝にて雪もとんと降らず寒さも甚だ薄くありましたが唯一種奇態な風が吹きました、夫れは普通の南風や北風でありません、婦人風と申して古今未曾有の穩かなる風であります、併し如何に穩かなればとて風のことですから間違つて強く成り過てはならぬと云ふ樣な御主意ですが、早くも既に婦人矯風會などゝ云ふ會が起りました、其外婦人敎育會で御座るの夫れ婦人衞生會だの夫れ婦人唱歌會抔と申してしかも皆大日本と云ふ大きな看板を掛たる御婦人方の會が陸續として起りました、就ては此講義室は昨日は大日本婦人敎育會今日は大日本婦人衞生會明日は大日本婦人何々會と云ふ樣な譯で毎日〳〵大日本の婦人だらけになりました、此勢で往けば我々男子たるものは追々婦人風に吹き倒さるゝかと氣遣う位の事です、併しながら御婦人方のことならば如何程非道い目に逢つても難有い譯であります。

右は吶辨ながら一寸洒落を申したのですが眞目になつて此會の事を考へて見ますれば他

の會とは異なつて全く御婦人方のみの手にて成立つた者だソーデス、實に御手際な事と存じます、夫故私は之を賛成して今日何か一言御話をするとに成りました、私は固と衛生の事に直接の關係がありませんからとんと面白い御話をするとか出來ません、或は眼の養生とか又は近眼の統計でも調べて御話すれば宜敷と思ひますけれど夫も出來ませぬから只物理學の領分に止まる眼鏡の御話を致ソート思ひます、此前の會に一寸拜見しました所では眼鏡の話は甚だ不適當だと云ふ感じか起りました、其は何故と申しますに眼鏡を掛けて御出の御婦人が餘り見へませんから其御方に向て眼鏡の事を話すのは面白味がないダロート思ふからです、併し又能く考へて見ますと丸で無用の事でもないと申しますは衛生會なり教育會なり元と男子より婦人に傳染して來たものですが眼鏡は未だ傳染しません、併し婦人風か強くなるに從て之も追々傳染するに違ないと思ますが、是丈は傳染させたくないものですから私は今日豫防の爲に些と眼鏡の惡口を申うと思ひます。

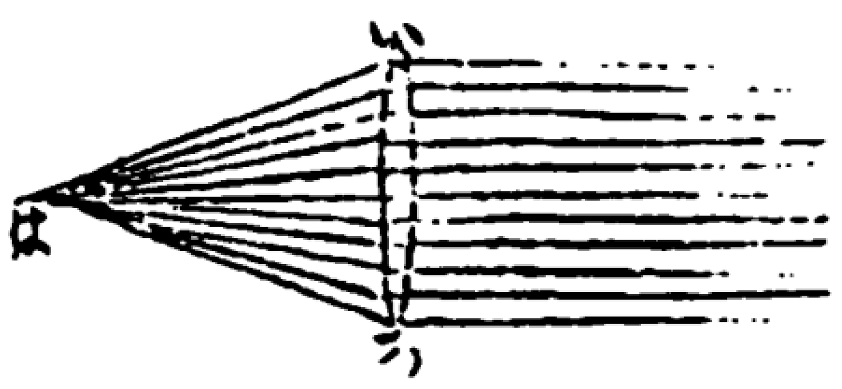
眼鏡の御話を爲るには先づ色々の不正視眼の事を申さなければ成りません、其第一は近眼です、近眼には生れ就きもあり眼の用ひ方烈しきに依て起るもあります、第二には遠

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

視眼です年寄が新聞紙を讀むに多くは之を遠さけて見ます是は近い處では視へないからです、又濫視眼と云ふがあります是は滅多にないが少し宛は誰にも有ると申す事です、濫視と云ふものは横線は見へても縦線が見へぬとか又は縦は見へても横が見へぬのを申します例へは辨慶縞を見ても縦の棒縞の樣に見へる眼が有るそうです。

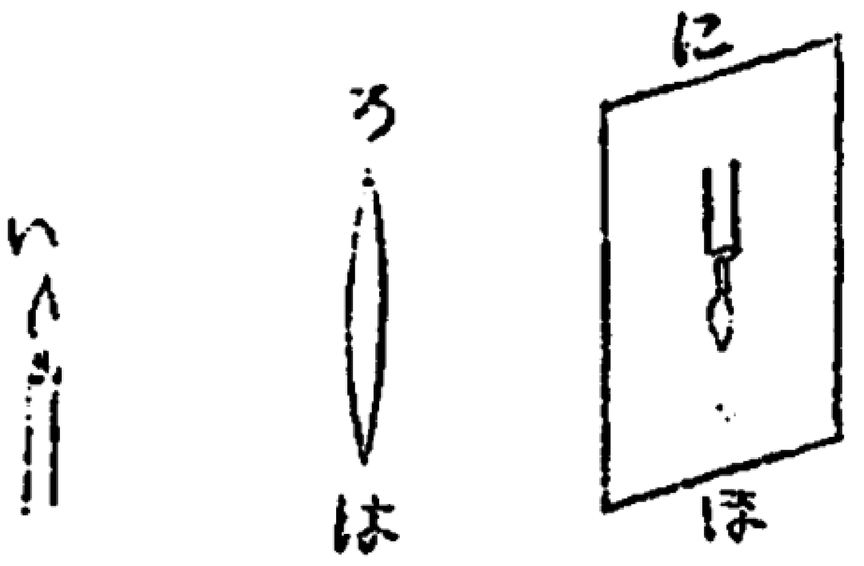
是からレンズの御話を致しますが皆樣御存の通り大道を通つて見ますと賣卜者か何か知りませんが坊さんの樣な者が往來傍に立て中の高くなつて居る丸い玉を日光に當てゝ木を焼いて居るのがあります、是が即ちレンズと申して凸に磨てあるガラスですレンズとは西洋語ですが丁度ランプとかコップとか云ふ樣に日本の言葉に成つて仕舞たのです、扨之を日光に當つれば木が焼ける譯は大陽から出る光線がレンズの中を通つて一ッの小さき處に輻輳するからです、(第一圖)其光線の聚る點(は)を焦點と申します、焦點には大陽の像が出來ます、像と申しても御分りに成りますまいが、御宅にて御隱居樣の眼鏡を假りて試驗して御覽なされば直に分ります、如何して試驗するかと申すに第二圖の如く點火したる(い)なる蠟燭を(ろは)なる眼鏡即ちレンズの前に置き其後に(にほ)なる白紙を徐々

第一圖



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

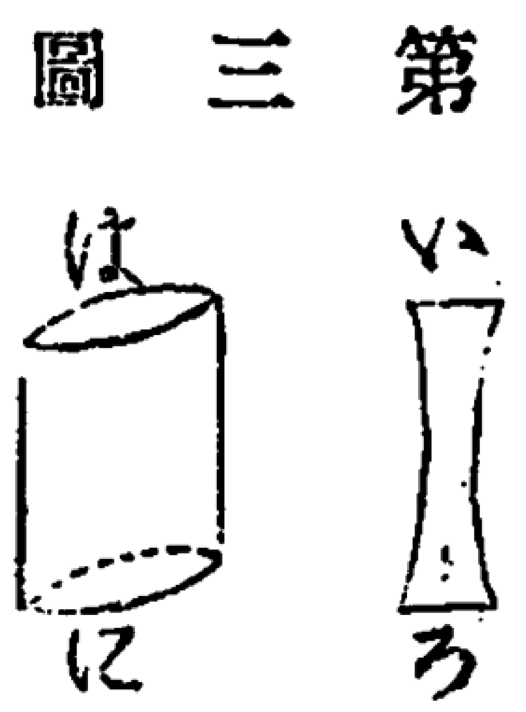
第二圖



に動かして見ると蠟燭の光りが紙に寫る場處が有ります、是が即はち(い)の像です、左れば大陽は此蠟燭に該當し焦點に聚まりたる光線は此像に該當します。

レンズには色々種類があります、右に述べたるは凸レンズですが第三圖(いろ)の如き凹レンズもあります、又第三圖(はに)の如き圓柱形レンズもあります、是は丁度竹を三個よ割り中の部を取り捨て其殘りを繼ぎ合せた樣なものです、凸レンズは光線を聚めますから聚斂レンズと云ひ凹レンズは之と反對で光線を散らすから發散レンズと云ひます、又圓柱形レンズは光線を一直線に聚斂します、聚斂レンズは中が高ければ高い程強く光線を聚めます、言葉を易へて申せば中の厚さが端の厚さに對して厚ければ厚い程光線が強く屈折されるのであります、夫故レンズに依て焦點の近いと遠との別があります、發散レンズ及圓柱形レンズにも同樣の事があります。

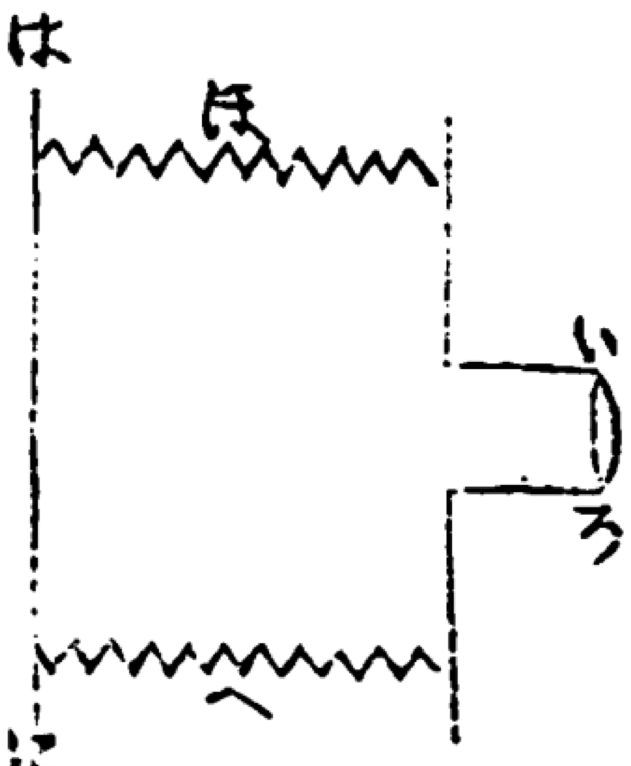
第三圖



是から眼の御話を致しませうが眼は寫眞器械と同じものです、何人でも寫眞屋へ行きて寫眞を取る所を御承知でしよう、其器の重なる部分は第四圖にて示す如く(いろ)なるレ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第四圖



ンズと像の寫るべき(はに)なるガラス板とです、人の眼玉の水晶躰と申すは此レンズと同し性質のもので眼の中の網膜と申すものは外物の像か寫る處にて即ち右のガラス板(はに)と同様のものです、處で寫眞器械には必すレンズとガラス板の距離を自由に變じ得へき仕掛(ほへ)が付て居ます、寫眞屋で徒をした人は必す御承知の通り(いろ)と(はに)の遠近に依て像が瞭然と寫つたり又は朦然と致します、左れは瞭然と寫つるには必す一定の距離が有ります、人間の眼に於ても遠方を視ると近所を見るとは多少水晶躰と網膜の距離を變ぜねは成りません、是は出來る樣に構造してあるものだソーデス、併し眼の性質に依て水晶躰の屈折が餘り強過きて外物の像か常に網膜の前に寫るとか又は屈折が弱すぎて網膜の後に寫るとか云ふ樣な工合で水晶躰と網膜との距離を少し位變するのでは足らぬ樣に成て來ます是が即ち眼鏡の必用を生ずる譯です、例へは外物の像が常に網膜の後に寫る時には如何なる眼鏡を用ふるが宜敷かと云ふに是は水晶躰の屈折能が不足なるより起ると故凸レンズを以て其不足を補へば宜敷譯です、又外物の像が網膜の前に寫る場合即はち近眼者は凹レンズを用ひて屈折の度を減ぜねばありません、又濫

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

視眼には圓柱形レンズを用ふれは宜敷御座ります。

右にて眼鏡と云ふものは如何なる譯にて其効を奏するか略其理屈が分つたで有ローと思ひますから、是より眼鏡の構造に付て御咄を致しませう、凡眼鏡は成丈け輕く拵へなければ成りません、重い眼鏡を掛けると鼻の上に痕が付いたり耳が痛んだりして中々苦しいものです、輕くするには大きくてはいけません又バチの工合が能くないと頭が痛みます、私の經驗にてはバチで頭を兩方から押すのは餘り工合が能くありません、一番宜いのは極軟なる張り金を耳に卷き付く樣に拵へてあるのです、是は頭を押すともなく又グラ／＼動かないで宜敷御座ります、又眼鏡を輕くするには篗を薄くか細くするが宜敷あります、伊達眼鏡を掛る人は金の篗を厚く付けて居ますが金は比重の大なるものですから甚た宜敷ありません、輕くする爲には篗を全く止めにしてレンズの端に穴を明け之に右の耳弦を付けるが宜敷あります、併し斯くするときはレンズの端から光線か入りますからキラ／＼して始終無用の刺激を受くるの不利があります」始終掛けて居る眼鏡は先つ此樣なものですか近眼或は遠眼の度が甚敷き人は平生ハ眼鏡なしで我慢して居て必用の時丈け取出して眼の前に當てヽ見るも宜敷あります、是には通例の眼鏡を小箱の中 五六

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に入れて懐中し入用の時には小箱を手に持つて之を眼に當てる樣に構造してあるのが通例です、又バチを以て鼻を挾む眼鏡が有ります、是は平生は糸にて首に掛け置き入用の時には鼻の上からギユツと押し付ける仕掛けにて不用に成れは顔を少々しかめると獨りでに落ます、西洋人は鼻が高いから始終之を掛けて居る人が有ります、日本人でも間々之を用ふる通人もありますが何分多くは鼻が低いから垂頭禮をする度毎にバタ〱落たり、又食事の時ソップの中に落込樣なことが間々ある樣子です、又一眼鏡と云ふ唯レンス一個を其の儘に用ふるのが有ります、是こそ西洋人斗り用ふるものダローと思ひます西洋人は眼が引込て居ますから眼の上下の骨の間に挾むのでわります、其の樣子は中々非凡樣に見へますから日本人も些と眞似を爲ては如何と存じますが、何分錦繪の役者抔を見ますると眼の方が額よりは遙かに飛び出て居る位ですから倒底行はれざることと存します、唯一眼鏡に柄を付けて之を手に持つて眼に當てる樣にするとハ出來ます、或る醫者の言ふ所を聞きますと近眼に成り掛る時に少し度の強き眼鏡又ハ丁度眼に合ふ眼鏡を用ふると次第に近眼の度が進む故に平生ハ少し弱き眼鏡を用ひ必用の時に今一ツ掛ける方が宜敷と云ふことです、是ハ是非二個とも耳又ハ鼻に掛けずとも一ツハ手に持てハ宜敷

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

譯です、大學の學生等には近頃澤山にある樣です、手て持つは暫時の事でなくては不都合ですから中には眼鏡を二重に結搆し必用の時は兩方を用ひ平生は一双丈けは眼の左右に配置致します、其有樣は恰も耳から眼迄ガラス窓を張りたるが如く隨分驚山らしくて可笑シー樣に思ひます、近頃舶來にて甚だ輕く且工合宜しき眼鏡がありますが何分鼻の處が餘り高く屈曲して居ますから日本人が掛けると眼鏡が餘り下の方にズリ落ちて行けません、ソコデ或る人は之を倒さに掛て居ましたが夫で丁度眼に當りますが是も何だか可笑しうは坐ります、又或人は紙撚にて耳に引掛を拵へ或は鼻の痛まぬ樣紙を卷付け其紙も折々取易へればは宜敷きに餘り構はぬものだから毛立ちたる紙ヌ手垢が付て最と汚穢らしく見へるのも有ります、又直經一寸も有るかと思ふ樣な大眼鏡に團子の樣なッヽパーリをかつて舌切雀の祖父の樣な風を爲して居る人も折々見掛けますが餘り見た所の宜敷ものではありません。

眼が惡るいならば何うと仕方のないとて眼鏡程結構のものはありませんが何しろ餘計なものが眼の前にクッ附いて居るのですから五月蠅はづてす、朝に晩に又湯に入る時に始終所き置に注意しないと一寸と地震だの火事だのと云ふ時に狼狽てヽ眼鏡なしで出れば

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

一寸先きも見へません、私か甞て失策をやつたお話しをしますれば、先年の夏旅行をしやうと思つて前夜スッカリ仕度をしました、平生は眼鏡の置き所を定めて居りますが、旅の仕度で寢所の工合までも變つたものだから不圖置き所がかわつたのです、翌日になつてイザ出かけ樣とすると眼鏡が見へない彼是捜して居る内に一番汽車には乘れないで一所に行かうと云つたものも徒らに立騒ぎ眼鏡一ッの爲に旅行が出來んと云ふ樣な差支を生じました、斯ることが無いとしても眼鏡は破損しやすきもので時としては失ふこともありますから何うしても掛換と云ふものが無ければなりません、講談師の如燕が人の困つた時のことを縁日商人がカンテラ取られた樣だと申ふしますが、眼鏡をなくすると其通りです男なれは馬に乘る時水を泳ぐ時にも此眼鏡が大層に妨げを爲します、併し學問をする男子の間には漸々其數が增加して參りまして其弊は終に眼鏡を掛ないと學者の仲間入りが出來ん樣に考がふる者あるに至りました、或人の川柳に「ドクトルと眼鏡をチョイと鼻にかけ」と中々能く穿つてあります、當人は餘程好い積りか知れませんが其實は却つて醜くいもので特に御婦人方は眼鏡の爲めに大に天然の美を損することであります、私の知て居る或る獨逸の婦人は餘程美人でありましたが近眼でもないのに眼鏡をかけたが

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

好と云ふ積りか例の鼻掛眼鏡をかけましたが、バネで壓されたのか或は他に原因があつたか知れませんが挾む所に腫物が出來て甚だ氣の毒に思ひました、眼がわるくもないに眼鏡をかけると云ふは丁度齒のわるくないに態々疵を付けて金の入齒をする樣なもので市人の憐を受くるとも反て識者の笑ひを買ふものであります、夫故ゑ私は眼鏡丈けは御婦人方に傳染せぬ事を切に希望致します。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

温熱が躰の上に及ぼす一部の効きの事

○家内理學（第十回）

第八章　温熱の生理上に於ける効驗の事

温熱は物を廣ろめ大きくするの性質ある事、すでに前にも述べたる如くなれば、此の温熱が、人の身躰の上に及ぼす影響も、亦た先づ其の身躰の一部分を廣ろめ大きくするにあるなり。それゆへ、入湯するか、又はパップにて躰だを温たゝむるか、左なくとも氣候温かなるときは、心持甚はだよろしく、余程愉快なるものなり、之は、温熱の爲めに、皮膚の血管（血の通ふクダ）が廣まり大きくなり、又た氣管の中を流るゝ血液も、温熱の爲めに緩やかに淡く且つ流れ易くなりて、自然に血の運行が盛んになるを以て、扨て

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は斯く快よくなるとなり、其上、又た温熱の爲めに皮膚廣ろまりて氣穴自づから大きくなり躰肉の氣を蒸發するとと多きより、尙また、心地よく感ずるの工合もあるとなり○之と相似たるとなるが、躰だに温熱を當つるときは其の當たりたる所ろ丈けが多少紅くなるとあり、之れ亦た肉が多少廣ろまり大きくなりたるより、血管の元と甚た細かりしものも頓ハかに太とくなりて、曩きには僅かに血の流れたるが、今では多く運行するとなりたるなどより、即ハち其邊を紅くするとなるなり○右二つの事はいづれにもせよ、温熱は躰だを快よくし、躰だの衞生の爲めになるように働らくものなるとを知るべし、然れは

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

溫熱過れば害ある事

此の溫熱余まりに過ぐる時ハ即ハち反つて害を起すの元となるなり。

即ち此の溫熱もし過れば反つて人身に害を及ぼすとは、實際に於て人のよく承知するところ也、例へば適宜を超えて溫熱が過ぐるときは、身躰先づ大ひに激し、感じ甚ハだ強くなり、心の働らき頓かに急となるを以て、暫らくすれば有樣全く其の反對に出で、身躰大ひに疲勞し、切りに睡氣を催うし、遂に働らきの心を失ひ、甚ハば横着不勝となるのみか尚は余りに溫熱甚ハだしきときは、遂いに病の元となるとあり。

但し溫熱の余まり高きが身躰に害を引起すは段々の事

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

温熱の頃かに變するは害ある事

なれども若し余り高き温熱の中にあり乍ら、頓かに冷やかなる所ろに出で丶、其變化急激なるときは之が爲めに起し來る害は更らに尤も大ひなり、之は今迄で身躰を温たゝめて、血管も廣ろく、血の通ひも多く氣孔も開き居る所ろが、突然冷氣にあひて、彼の多く外に通ひ居たる血は一時に收縮して元に歸り氣穴は頓かに塞ぎて躰内の熱氣を發するあたはず遂に内に熱してカゼとなり之より引ひて亦た種々の病を生ずるもの也故に人間の躰だに尤も適したるは、華氏の六十度乃至六十五度(此の九月十四五日の頃は、府下の正午にて七十度位ひ、それゆへ朝夕は大抵六十度乃至六十二三度なり、之が即ち茲に

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

物の燃ゆる譯の事

云へる温度に相應す)位ひの温度は尤も相應の温たかさとは爲すなり。

○第九章　人工温熱並に薪炭の事

人造熱とは、人の力にて起すところの熱を云ふ、而して此の人造熱を起すには、色々の工夫あれども、先づ尤も普通なるは、即ち薪を焼き、炭を焼くとなり、此の薪を焼き炭を焼きて温熱の起る譯は、薪及び炭の中に存する炭素と云へるものと、空氣の中に存する酸素と云へるものとの、結び附き合ふ上の働らきに由るとなり、蓋は空氣と申すもの、元と色々の氣を含み居れども、先づ大畧に云へば窒

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

燃ゆる時の動らきの事

素とて人の息氣をフサグべき氣と、酸素即ち物を燃やし物の生成を助くる所ろの氣との、二ッより成り、空氣五升の中には窒素四升酸素一升の割にて混合することなり、故に、物の燃ゆるは、此の酸素と其の物の炭素との結び付く上より起るものと知るべし。

炭とは、木を燒きて製したるものゆへ、全躰殆んど是れ炭素の塊まりの如きものなれども薪即ち色々の木枝より成るものは、之を分つに、必らずしも炭素のみにあらず、即ち、炭素の外かに水素酸素などと云へるものも合し、此の酸素水素炭素の三ッが合して、木となり枝となるとゆへ之を燃やして其の中の炭素が燃ゆるときには他の二ッ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

のものは離れて何者かとなるべきわけなり。即ち酸素は其儘に立ち去り、水素は烟と爲りて立ち去り、或は此等のものが合して水となり、此の水、火の爲めに熱せられて水蒸氣となり、上に昇り行くとあり。而して、彼の炭素と空氣中の酸素と合したるものは炭酸と云へる新規の氣となりて飛び行く故に空氣の中には固より亦た此の炭酸の氣が存在するとなり、其の存在する有高は、空氣の二千分の一なりと云へり年々日々に火を燒きて炭酸を發散すること甚はだ多ければ此の高も亦た大ひに增加すべき筈なるに何故いつも二千分の一として存するやと云へば之は草木の葉が炭酸を吸ひて分解し、其の葉より亦

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

水素も亦は温熱の元たる事

た酸素のみを吐き出すゆへ、既に炭酸となりしものが亦たしても〳〵元の酸素に反へり來るの都合とはなる也。但し、此を燃やすときに、水素と亦た酸素と合するとなり、即ハち薪の中の水素は、空氣中の酸素と合して、水と爲り此の水、水蒸氣となりて上に昇る、而して水素の酸素と合して熱を發するは炭素が酸素と合して同じく熱を發するよりも、凡そ三倍の強さありと云へり、即ハち、純粋の炭素のみより成りたる炭を燃やして、水一斤を若干度に温ため得たらんには若し之に水素混合し居りたらんとき、其の水素の之を温たむるには丁度水三斤を其丈の度に迄で高め得べき程ありと云ふ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

生木の損の事

水素の燃ゆるは、斯の如く温熱を高むるの助と爲るものなりと雖ども、水は決して燃ゆるものにあらず、隨つて亦た、之によりて、温熱を出すともなき也、左れば、薪に水の混じ居るは、(即ハち生木と云つて水氣の全たく干上らざる者)第一、其の燃方を惡しくするのみならず、燃たる上にても、大ひに其の熱度を低くする也、之は何故と云ふに、既に前にも説きたる如く、水を温めて温湯となし、此の温湯を更らに一層温ためて水蒸氣と爲すには、夫丈けの温度を要する譯にて、即ハち其丈の温熱をば所云る潜熱と爲し去るの理あり、故に薪の中にもし水氣混じ居れば、此の薪の燃ゆるとき、一方には火を熾にして熱を出し乍ら、此の熱

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の幾分は矢張り彼の水氣を温めて水蒸氣と爲す爲めに使はれ、潜熱と爲りて物を温たむるの効能を呈せざるものとなるなり。故に生木十貫目を買ひて薪とするものは、此の生木の中に存する水一二貫目をも買ひたるものにて、即はち水一二貫目に對して薪一二貫目の價ひを拂ひたるの損あり、然るに、其の損は之れのみならず、此の十貫目の薪を燃し、其丈けの温熱を出し、之にて物を煮る等の効能を爲すとなるに、之に水氣の混じ居る爲めに、十貫目の薪の中ち一二貫目は、又是れ水氣を温ためて之を水蒸氣となし、即はち潜熱と爲りて物を温たむるの功を呈せざるものとなる也。左れは前に一二貫目を損し、后に亦た 七〇

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

薪の發熱力の事

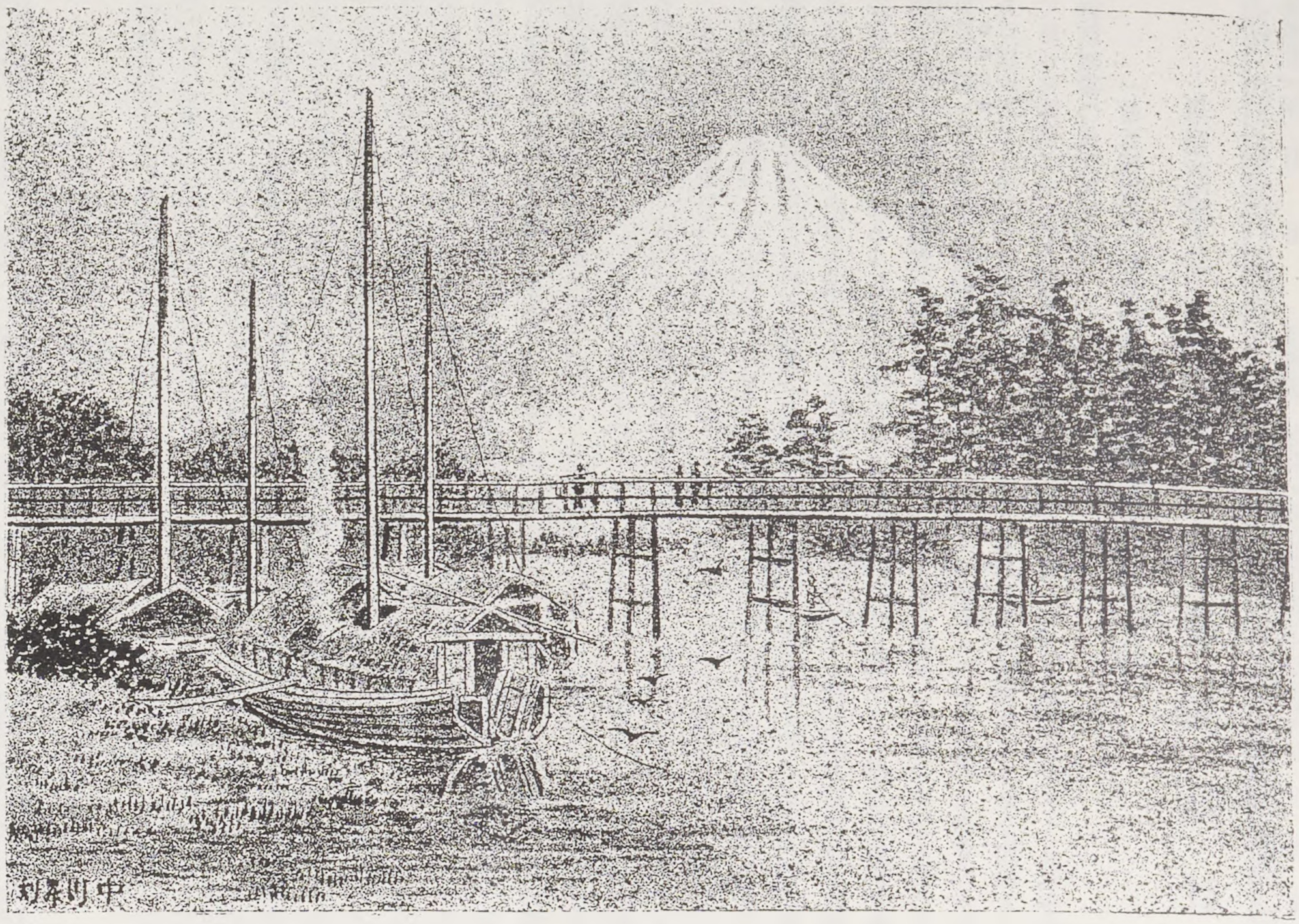
一二貫目を損し、生木を買ひたる爲に都合三四貫目の損を爲すなり、生木は少々安くとも、決して得にあらず、決して之を買ふ可らず、亦た彼の炭に水をかけて燒き出ありと思ふものも、此れと同樣の損を爲すもの也、よく〳〵考ふべし。

扨て、此の如きもののゆへ、薪を買入るゝにも、余程注意せねばならぬとなるが、之れは、如何に注意せば宜しからんと云ふに、即はちいろ〳〵の薪の熱を發する力の多少を承知することに在るべしと思はる、そも〳〵乾いたる薪は、其の如何なる木たるに關はらず凡そ同じ目方のものは、即はち亦た同じ高の熱を發するものなれども、何れの薪

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

にも皆な多少の水氣ありて、所云る乾き上りの度同じからず、即ち其中に含まれたる水の量に増減あるなり、扨ては同じ目方の薪と云へども、其の熱を發する力に多し少なしの相違あるもの也、之を以て、或る學者は同じ容量の木をいろ／＼に試驗して、其の熱を發する力の多少を試驗したるとあり、其の試驗したる表は追て掲げ出すべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY



Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

（每週一回各土曜日出版）

此雜誌は婦女子の心得となるべき事柄を一切書謹したるものにて社說には當今の時勢に於て女の學び置くべき事件を信切に教喩し又有觸れたる弊害は厭慮なく之を諫め當ま務むべき女の責任は綿密に之を勸め專ら女流を開化に導くの案內を示し論說には我國にて有名なる學者新聞記者等の女に關する論話を請ひ又外國の書籍雜誌等に出でたる有益の文章は抄譯して相揭げ特に女學に關し有名の人々が演說さるゝ時は必ず之を速記文にて寫し取り載するに付假令ひ之を傍聽せざる人々にも紙面にて座ろに之を耳にするの愉快を覺へしめ叢話にはすべて女のたしなみとすへき事柄を最も平易に談話するとす故に母親が子を育つる心得、妻が夫に仕うるの道 娘が學校にて勉强する方法等を初として家內經濟、家內衛生、等に大切なる敎又は縫針、洗濯、裁燒、料理の案內若くは交際となりしの禮式、男女つきあいの用心、讀書運動の要目等は皆な此處に於て懇ろに敎示すべし次に批評には時々に出版する女學に關係の新書の大意を示し且つ之は讀て宜きもの之は惡きものと一々に評して讀む人の便利を計り佳傳には古今東西にて有名なる婦人は固より凡そ貞操孝烈にして女の鏡とすべき女流の傳記は皆甚だ高尙の文ま書つゞり尙ほ面白くして有益なる女の小說を一つ宛副へ專ら實際に女の手本を現はし寄書には各女學校生徒の文章及び有名なる女流の人々の投書を集め尙折々は編者の評をも附し雜報には內外に起る女學女事の景況を一切取集めて座がら滿天下の女の景況を示し讀者をして爲に勵み爲に喜び時勢の赴く所を容易に知らしむるの工夫を爲し其外珊瑚の玉と稱する女學上の金言を每號五つ六つ宛相載せ西洋の有名なる學者詩人が咏出たる詩又は文章の中尤も面白き英語の辭句をあちこちに插入し每號高尙細密なる圖書を入れ折々は各女學會の景況を特別廣告として細かに報告し尙ほ女論に關する點取文中優等なるものを附錄として載せ文章はすべて平易優雅にして不淸潔の文字は一句だも紙面に登さゝる等を此雜誌編輯の規則となす

一册五錢郵税一錢府內無税。十册前金郵税共五十八錢。

東京新橋日吉町八番地　女學雜誌社

明治廿一年　月　日　印刷者　東京々橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

婦人言論の自由

一冊十錢 郵税四錢（新版）

婦人矯風會書記佐々城豐女譯

德富猪一郎君評曰く婦人の言論ハ人を服するに非ずして人を勸誘するに在り而して其勸誘するや或ハ淚となり或ハ笑と爲る然れ共其一泣一笑時に或は千言萬語滔々たる議論に優れると無きにあらず吾人は佐々城姉が此譯の世に出でたるを喜び世の姉妹に此書を一讀せられんとを推薦す云々

巖本善治君評曰く然れども余が此書に於て特に尤も歎賞して措く能はざる者は本書之著作の由來記にある也記に云く月明の夜妾良人と共に出でゝ逍遥す偶ま會堂に入て共に座に就く時牧師曾后の集會に云々此時妾良人の面を窺ふに良人勃然として立ち反論して之を不可とす妾實に晴天霹靂の思ひありき然れども直ちに携ふる所ろの速記用紙筆を取出して則ち良人の論を筆す記して成る所のもの即ち此書なり云々

諸姉妹乞ふ一讀を賜へ。

材料新誌

自一卷至八卷 一冊 郵送料共十錢

見本一部は郵劵五錢にて宜し

演説と著作との材料を集めたる書類眞に多き中に吾人は確信す其尤も精密にして且つ其の種の尤も手廣きは必らず本書に超ゆるものなかるべしと之は讀者か先づ一讀の上へ其の實否を知られんとを欲し見本一部を需めらるゝ者は郵劵五錢にて宜し都合八冊迄で出來し一冊紙數三十頁以上定價十錢也故に先づ見本一部購讀の上御注文あらんとを乞ふ而して見本には八冊の中何號にても發送すべし

女子必携 今世ひめ鑑

新刊美本一冊

關輪正路纂著〇木村熊二田口卯吉兩君序

定價六十錢郵税十二錢

右出版いたし候是非は自づから公評あらん當世婦女子の心得べき承知すべき質問すべき箇條は大抵悉く記載し有之候蓋し古の「ひめ鏡」の重寶なりしとを御存知の方々は此開化したる當世のひめ鑑の亦同樣に助けあるとを想像し玉ふべし

發兌所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

女學雜誌社出版書目

船越鼎太郎著
產婦小兒 攝生法
定價金十八錢 郵稅金四錢

鈴木弘恭大人著
改正增補 文法口授
定價金十八錢 郵稅金四錢

横山雅男君著
婚姻論
定價金三十五錢 郵稅金十四錢

嚴本善治編
木村鐙子小傳
定價金十錢 郵稅金六錢

中島湘烟女史著
善惡之岐
定價金五十錢 郵稅金十四錢

渡邊鼎君著
東髮獨案內
定價金十五錢 郵稅金四錢

發兌 女學雜誌社

定價
通信女學講義錄一册七十頁以上定價二十錢
半年分前金一圓、一年分前金一圓八十錢也
但し右何れも郵稅を要せず

是迄發兌の分
前號まで既に十二號と相成り即ち一ヶ年分を出版したることと爲りぬ。凡そ是迄の分を一まとめにして買入らるゝには同じく右の割引を致すべく。通信女學は初めより引續き御覽なくては利益も少かるべしと存候に付改て從前の號數購讀を勸め參らす

廣告の事
廣告料一行五錢に改む但し二十行以上は一割引四十行以上二割引とす。此講義錄は久しく保存せられ永久貴婦人方の机上に備置かるゝものゆへ之に廣告せらるゝは他の一日限りの新聞紙もしくは一時流行の雜誌などに廣告せらるゝよりは御便利多かるべしと存候事

期日
本錄は毎月十五日を定日として出版す同日もし日曜日に當れば其翌日をいたし候

東京京橋區日吉町八番地
發行所 女學雜誌社

東京々橋區日吉町八番地寄留
持主兼編輯人 嚴本善治

東京芝區源助町十一番地寄留
印刷 森田豐

東京秀英舍印行

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY